



ビヨルンは 天使になりたい

キャロリーナ・マリン
(ほんとうにあった話をもとに書かれました)

このお話はアメリカ合衆国での出来事です。

ビヨルンは新しいお家にあるたくさんの大きな段ボール箱を見回しました。ビヨルンの家族はアルゼンチンからアメリカ合衆国に引っ越したばかりでした。

こんなに遠くに引っ越すのはこわいことで、知らないことだらけでした。けれども、家族と一緒になら、すべてはうまくいくと知っていました。

ビヨルンが家族の荷ほどきを手伝っていると、ママは大きな箱を手にとってにっこりと笑いました。「これにはクリスマスのオーナメントが入っているよ!」と、ママは言いました。

ビヨルンはにっこりしました。クリスマスが大好きで、家族と一緒にクリスマスを祝うのを楽しみにしていました。新しい場所での生活にはまだ不安を感じていましたが、もうすぐクリスマスだということが分かったと元気が出てきました。

数日後、ビヨルンの家族は一緒にすわり、クリスマスについての家庭の夕べのレッスンをしました。パパは、クリスマスはプレゼントをおくる季節だと説明してくれました。

「やった! プレゼント!」ビヨルンは言いました。

「そうね、プレゼントをもらうのは楽しいことね」と、ママは言

いました。「でも、救い主におくり物をささげることはもっと大切なよ。」

「どうやってイエス様にプレゼントをあげるの?」ビヨルンがたずねました。

「イエス様がされたように人に奉仕すると、イエス様もよこんでくださるのよ」と、ママが言いました。

翌朝、ビヨルンは玄関のドアをノックする音を聞きました。ベッドから飛び起きて、だれなのか見に行きました。でも、パパとママがドアを開けると、そこにはだれもいませんでした。代わりに、ママは玄関先で小さな、ぴかぴかのプレゼントを拾いました。

「どこから来たの?」ビヨルンはたずねました。

「よく分からないわ」と、ママは言いました。「天使かもしれないわね!」

ビヨルンは目を丸くしました。「天から来た天使ってこと?」パパがほほえみしました。「いいや、親切なことをしてくれる人たちを、天使とよぶことがあるんだよ。この地上での、天のお父様のお手伝いさんのようなものだね。」

ビヨルンは空中に飛び上がりました。「ぼくも天使になりたい! ぼくもほかの人に親切なことをしたいな。それがイエス様へのクリスマスのおくり物になるね。」

「すごくいいアイデアだね!」パパが言いました。「イエス様はきっときみのおくり物を気に入ってくださるよ。」

その週の残りの時間、ビヨルンは毎朝起きると、玄関先に新しいプレゼントが置いてあるのを見つけました。天使が家族におくり物を置いてくれて、とても愛されていると感じました。自分も家族を愛していることをしめしたくなりました。

そこで、ビヨルンは仕事に取りかかることにしました。両親やきょうだいへのプレゼントをこっそり用意しました。パパが仕事の中にくつをみがいてあげたり、ママのためにハートをかきました。



「親切なことをしてくれる人たちを、天使とよぶことがあるんだよ」と、パパが言いました。

そして、お気に入りのおもちゃの車の一つを弟のためにラッピングしました。妹のためには風船ガムを手に入れました。

ビヨルンはそと一つ一つのプレゼントに名前を書き、クリスマスツリーの下に置きました。みんなのうれしそうな顔を見るのが待ちきれません! 考えるだけで、心が温かくなりました。

クリスマスの日、ビヨルンは家族一人一人にプレゼントをわたしました。うれしくて、じっとすわっていられませんでした。

ピカピカのくつを見たパパは、「わあ、ありがとう、ビヨルン! とってもきれいだ」と言いました。

ビヨルンの弟と妹はプレゼントを開けると、飛び上がってビヨルンをハグし、「ありがとう!」と言いました。

ママはラッピングを開けてビヨルンがかいた絵を見ると、ほほえみしました。「ビヨルン、あなたは今年のクリスマスをとっても特別なものにするのを手伝ってくれたわね。わたし

たちの小さな天使でいてくれてありがとう」と言いました。

ビヨルンは幸せを感じました。家族に愛をしめすことが、イエス様にささげる完璧なプレゼントだと知っていました! ●

「主は、自ら進んでほかの人の人生において天使となってくれる人をつねに探しておられるのです。」
七十人会長会カルロス・A・ゴドイ長老
「天使を信じる」
『リアホナ』2020年11月号、87

イラスト/ターエル・タンカン

